

---

# パン屋と精霊のお話

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パン屋と精霊のお話

### 【Nコード】

N3686T

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

『東の大陸の大きな国、ダイトーに伝わるいくつかの物語を紹介してゆこう。精霊やその上に属するジンの物語が多い土地。』・・・  
なんて括りで発表してた。

あつたのかも知れないし、なかつたのかも知れない。  
真実は、不死の魔神たちのみが知る。

ダイトーの片田舎でパン屋を営んでいたトマスは、その月、店をたたんだ。

ことの起こりは二年前だった。

店に、見たことのないような美しい娘が来た。

透き通るほどに白い肌、光に溶けそうな金の髪。水面が映し出されたかに見える青い瞳。

ほっそりと、いまにも風に乗って飛んでいってしまいそうな、可憐な娘だった。

「いらつしゃい、」

何を話すかも決まらないまま、型通りの挨拶が口をついてしまい、少し後悔する。

もつと気の利いた台詞のひとつも言いたかったのに。

「焼きたてのパンを下さいな。」

娘はにっこりと微笑んで、そう言った。

店に並ぶパンはみな、今朝から仕込んで順に焼いていった、焼きたてばかりだったが、トマスは閃いた。

「ああ。それじゃもうじき、パンが焼き上がるから、少し待っていてくれますか？」

今、かまどに入っているパンが、5分もあれば焼き上がってくることを思い出したのだ。

はい、と渡せばそれで見納めになってしまう美しい娘と、あと5分間も長く居られる。

5分間に、トマスは天気の話と納屋に住みついた猫の話をした。

猫はこの間、6匹もの子猫を産んで、大変だった。最後の1匹は死にかけていて、色々と手を掛けてやったけれど、結局、その夜に冷たくなってしまった。

ウチで死んだのも何かの縁だろう、と、温かいかまどの中へ入れてやった。

火の精霊が肉を食べて、お礼に、魂を天に送り届けてくれるだろう。煙突から昇る子猫の煙は、夜の空に紛れてトマスには見えなかったけれど。

「残りの子猫は無事ですか？」

娘は恐ろしげに言った。

かまどに棲みつく火の精霊に、食べられはしないかと心配していた。「元気ですよ、お客さん達が餌をたらふくやるものだから、もう丸々と太って！」

おどけた調子でトマスが話すと、娘もつられて笑った。

春の訪れを告げる、そよ風のような感じだ。

トマスはこの娘に一目ボレをした。

そして、半年も経つと、二人は結婚した。

トマスは朝からパンを焼くための準備をしている。

そんな時、初めて、かまどが喋り掛けてきた。

「おい、トマス。」

お前の嫁さんは、どうして亭主にばかり働かせて、手伝おうとしないんだ？」

びっくりしてトマスが振りかえると、かまどの口から、真っ赤な色をした火の精霊が半身を出して、こちらを眺めていた。

「ああ、びっくりした……。」

どうしてって、そりゃあ、彼女も忙しいのさ。朝から洗濯やら掃除やら、お昼の用意もしなくちゃならないんだ。俺は今まで一人でやって来たんだし、これからも一人で頑張れるさ。」

「やれやれ、甘いもんだなあ。

そんなんじゃ、女房にいつか尻に敷かれるぜ？

他の店の亭主を知ってるか？ 皆、女房に手伝わせてから、用事もさせてるんだぞ。」

精霊の言い方に、少しムツとしながらも、トマスは考えた。

・・・確かに、彼女と結婚して半年になるけれど、まだ一度も仕事場へは来ていない。

このかまどの傍の作業台を掃除するくらいは、してくれても良さそうだと。

そして、その夜、トマスは女房にそれを命じた。

「朝、作業台の掃除をしてくれるだけでいいよ。

忙しいのは解ってる、他の亭主たちに顔向け出来る程度の事だけでいいんだ。」

妻は渋っていた。

ややあって、一つの条件を付けた。

「・・・解りました・・・。けれど、一つだけ、お願いがあるんです。

かまどの戸は、必ず掛け金をして欲しいんです。わたしがあの場所へ入る前に、必ず。」

トマスは快く承知した。

そうして、朝、トマスはかまどの蓋に掛け金を掛け、妻を呼んで、二人で朝の準備をするようになった。妻は、ここでも変わらず、せ

つせと働き、トマスを助けた。

二人は幸せだった。

「なあ、旦那。

あんたの嫁さん、すごい美人だつてなあ？」

ある日、かまどの中の精霊がまた、話し掛けてきた。

トマスは忙しく、パンの種を並べながら、少し頬を緩めた。

「なあ、旦那。

最近、かまどの戸を閉めちまうだろ？ せつかく近くに居るのに、あんたの嫁さんの顔がちつとも見えないんだよ。どんな美人か、つて、期待してるのにさ。」

「そうかい？・・・でも、約束だからなあ。」

トマスはまんざらでもないので、少し残念そうに言った。

美しい妻を、誰かれ構わず見せびらかしたいと日頃から思っていたのだ。

「なあなあ、旦那。俺とあんたの仲じゃないか。

明日、ほんの一日だけでいいから、掛け金を外しといてくれないか？ そおつと、ほんの隙間だけ開けて、あんたの美人な嫁さんを見るだけだからさ。」

精霊に頼み込まれて、トマスは仕方なく承知した。

覗いて見るだけなら、妻も許してくれるだろう、と思っていた。

翌朝、早くに起きてトマスはパンの種を準備する。

かまどの蓋の掛け金を、この日は掛けずに妻を呼んだ。

美しい妻が仕事場に姿を現わした途端・・・かまどの蓋が勢い良く開き、火の精霊が妻の手を引き、あつという間にかまどの中へと引きずり込んで食べてしまった。

妻は、風の精霊だったのだ。

火の精霊は、風の精霊が大好物だという事を、トマスは知らなかった。

妻が、正体を隠して恋した相手に会いに来た精霊だった事さえも。本性を現わした火の精霊は、今度はトマスに襲いかかった。妻を食べようと思った時から、こうするつもりでいたのだろう。

トマスはパンの種をありつたけくれてやった。

それでも足りない分は椅子や机もくれてやり、そして最後に水のいっぱいに詰まった大きな樽を、かまどの中へ突っ込んだ。

じゅわわわわ・・・

火の精霊も、水に食われて死んでしまった。

水の精霊たちは立ち昇り、げらげら笑って逃げ去った。

トマスはがっくりと項垂れ、立ち尽くしていた。

そして、その月の終わりの日に、トマスはここを出ていった。

おわり

(後書き)

発掘品。その2。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3686t/>

---

パン屋と精霊のお話

2011年6月28日07時35分発行